障害福祉と造形活動

障害福祉の中で生まれた造形活動の魅力に出会う機会を

滋賀県では、糸賀一雄らにより設立された「近江学園」で粘土を使った造形活動が始まりました。その後、こうした造形活動が県内の福祉施設に広まり、その中で生まれた作品には、アール・ブリュットとして評価を受けているものもあります。「アール・ブリュット（ART BRUT)」とは、「生の芸術」という意味のフランス語で、日本では2010年に開催された展覧会「アール･ブリュット･ジャポネ」から関心が高まってきました。

滋賀県ではこうした福祉施設での造形活動を、県内のさまざまな場所で紹介するなど、福祉の現場で生まれたアートの魅力を広める活動に取り組んでいます。

澤田真一《無題》2007年 滋賀県立美術館蔵

実際にみてみよう

滋賀県立美術館

山田 創（滋賀県立美術館学芸員）

滋賀県の障害福祉の現場から、たくさんの才能あふれるアーティストが世に送り出されてきました。彼らの作品は、全国各地の美術展で紹介されています。2013年には、栗東の福祉施設に通う澤田真一さんの作品がヴェネツィア・ビエンナーレに出品されました。こうした流れは、福祉のみならず美術業界にも影響を与えています。

撮影：大竹央祐氏

美術館では、澤田さんの作品をはじめ、滋賀の障害福祉と造形活動にかかわる作品をコレクションしています。

ボーダレス・アートミュージアム NO-MA

横井 悠（ボーダレス・アートミュージアムNO-MA主任学芸員）

粒を並べる、点を打つ、線を描く――。ささやかな方法であっても、じっくり向き合って作ることで、想像を超えた、びっくりするようなアートになっていきます。こうした作品は、どのような人が、どのような気持ちで作っているのでしょうか。作品が生まれるところを知ることで、「自分のなかにある多様な世界」に出会えるかもしれません。また、その制作を支援する人や家族とのかかわり、それをみんなで「おもしろい！」って言い合える場所が、作者の「つくる」を支えているということも大切な視点です。

ひろがる障害者スポーツ

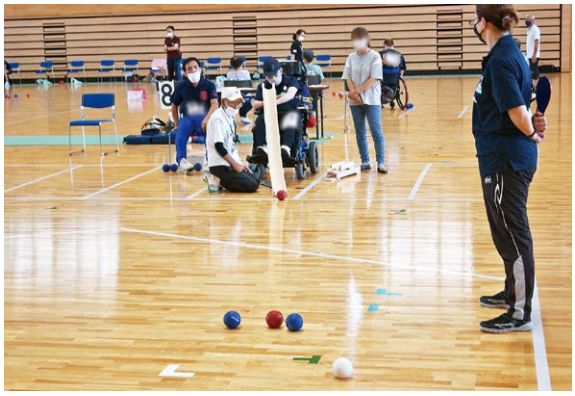
障害の有無を問わず参加できるさまざまなルール

障害者スポーツとは、障害があってもスポーツ活動ができるよう、障害に応じてルールを変更したり、用具などを用いて障害を補ったりする工夫がされたスポーツのことを言います。

障害のある人だけでなく、子どもや高齢者、または体力に自信がない人や運動が苦手な人みんなが楽しめるようになっています。

●ボッチャ

「ジャックボール」と呼ばれる白いボールを投げた後、対戦する両者がそれぞれ赤と青の６球を投げ合い、自分の球をよりジャックボールに近づけた方が勝ちとなるスポーツです。手で投げることのできない選手はキック、あるいは競技アシスタントのサポートを受けながら、「ランプ」と呼ばれる補助具を使ってボールを転がすことができます。



●ゴールボール

３名１チームで、鈴が入ったボールを転がし合い、相手ゴールに入った得点数を競う対戦型の競技です。選手は全員「アイシェード」という光をさえぎるように作られたゴーグルを着けて参加します。視覚以外のすべての感覚を研ぎすませ、チームで協力し合って競うゴールボールでは「チームワーク」が一番の見どころです。

●フライングディスク

プラスチック製の円盤（ディスク）を投げて競います。「アキュラシー」という投げた距離の正確性を競うものと「ディスタンス」という飛んだ距離の遠さを競うものがあります。投げ方にルールはなく、障害のある人もない人もハンディキャップなしで競うことができるスポーツです。